

飛行機野郎

1979（昭和54）年8月20日は、名古屋空港で私が「パイパー・チェロキー」で初の単独飛行をした日だ。当時37歳。古森教官は対潜哨戒機の元搭乗員で、海上自衛隊員だった。いつもの訓練が終わり、「じゃー、今から単独飛行をするか」と、前触れもなく冷静に言われたことが、返ってプレッシャーになった。思わず「本当に行くのですか」と聞き直した。

それまでの飛行時間は22時間で、単独飛行すれば日本フライングクラブでは最短記録となるという。教官が同乗しないフライトに不安を感じながら離陸した。1人で飛ぶと機体が70キロ弱くなるので、急上昇ができた。高度3000で進路を蒲郡市に取り30分後、

伊藤製作所社長

伊藤 澄夫 44



ヘリの訓練後 49歳の私

多くは私が飛行機野郎と知っているため、大歓迎してくれた。高度6000で飛行したため私の顔が良く見えたらしい。もちろん、初単独飛行で緊張する私には誰かとは分らなかった。

教官がいれば、美しい鈴鹿山脈の景色を楽しみ、低空でゴルフアートを翳かした。復帰することも考えている。

90度のライトターンをして篠島に降下した。高度5000で小型ポートにバンクを振ると、両手を振って応えてくれた。引き続き北西に進路を取り、四日市市へ向かった。今エンジンが止まったから伊勢湾にジャボンかと思うと、汗びりクラブへと向かった。キャデットの

りしたものが、この日は何も目に入らない飛行だった。その後、稲沢市上空で管制塔に着陸許可を取り、ファインナル・アプローチ後、機体が軽いためか通常より30分ほど先に着陸した。そこへ古森教官が真っ青な顔をして駆け寄ってきた。「伊藤君、2時間近くどこまで行っていたのだ。初単独飛行は通常稲沢上空を回って、20分以内

ファースト・ソロ・フライト

に帰ってくるものだ」と叫んだ。教官はすぐに帰ってくるかと考えて、駐機場ですっと待っていたのだ。

歴史に「if」はないが、飛行機に憧れていた私がもし15年前に生まれていたら、鹿児島・知覧の特攻基地から米空母に向かって突っ込んでいただろう。私が飛行機から降りた理由は金銭